

皇學館大学  
ボランティアルーム

令和2年度 活動報告書





# 目次

担当教員挨拶	1
代表あいさつ	3
1. コーディネート報告	
・令和2年度ボランティアコーディネート 活動報告	7
2. ボランティアルーム企画・活動報告	
・募金班 活動報告	13
・福祉講座 活動報告	17
・手話講座 活動報告	21
・くらたやま企画 勉強会 活動報告	26
・倉陵祭担当（パラスポーツ） 活動報告	29
・他大学視察 活動報告	32
・季刊誌 活動報告	33
3. アンケート報告	
・令和2年度アンケート報告	39
4. 資料	
・令和2年度ボランティアルーム学生スタッフ一覧	53



## 令和2年のボランティアルームを振り返る

ボランティアルーム担当教員

教育学部 叶 俊文

令和2年度のボランティアルームの活動を振り返ってみると、日本全国と同じように新型コロナウイルスの感染状況に振り回された一年であったように感じている。

何もできないというのか、どうすれば良いのかも分からないままに、ただ突っ立っているような感覚を受けていた。なぜそうなるのかというと、ボランティアの依頼が無くなってしまったということがあげられる。ボランティアルームの役割は、学外からボランティアを求める人とボランティアを希望する学生とを結びつけることが一番の業務となる。その結びつけるボランティアの依頼がなくなることなど考えもしなかった。地域のさまざまな活動は中止になり、訪問を考えていた老人福祉施設や学校は訪問者を制限するようになった。すべては、新型コロナウイルスの感染を防ぐことをねらった対策ということになる。感染による死者も出ていることを考えれば、当然のことのように思われる。この状況の中で停滞が続いてしまったことになる。

東京の大学等が軒並みオンライン授業に切り替わった中で、幸いというか皇學館大学は対面授業を行う方向に進んでいった。5月25日からはゼミ科目の対面授業を先行実施し、6月1日からは100名までの科目での対面授業が開始された。もちろん、注意すべきことを守ったうえでのスタートになったわけであるが、これは学生にとっても大きな一歩であったと思っている。4月、5月と停滞したボランティアルームの活動も、少しずつではあるが動き始めたことになる。しかし、ボランティアの依頼はなかった。

この状況の中で何をすべきかと考え、学生スタッフリーダーとも話しあった結果、この一年を「学生スタッフのスキルアップの一年」にしていこうということに至った。そう決まてからの学生スタッフの動きは早く、さまざまな企画が立ち上がり実行された。伊勢市社会福祉協議会とのコラボ企画、自分たちのスキルを高めることを目的とした手話口座などが行われた。もちろん、ボランティアルームの活動を地域に知らせるための季刊誌は発行され、新型コロナウイルスの感染拡大の中でも、活動を続けていることを広めることはできたと考えている。その点では、学生スタッフのスキルアップを図る一年というのは後半において実践されたと思いながら、学生の素晴らしさを再発見することができたと感じている。

この一年がボランティアルームにとって、来年度以降のステップアップの土台になって

くれることを期待している。ただ、4年生の学生スタッフにとっては厳しい一年になったのではないかと考えている。最高学年になって、こんなことをしてみたい、こんなことを取り入れようと思っていたこともあっただろう。それらが実践されずに卒業しなければならないことは悔いが残るところでもあろう。しかし、その思いは後輩に託してもらいたい。きっと新しいボランティアルームとしてホップしてくれるだろう。

## 深化の年へ

皇學館大学ボランティアルーム 学生スタッフ

現代日本社会学部現代日本社会学科

4年 中西正樹

2020年3月13日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく自粛要請、その後に発令された4月7日の緊急事態宣言は私たちの生活様式を大きく変えた。日本の経済は大きな打撃を受け、飲食店や宿泊施設は経済活動の縮小を余儀なくされた。だが経済以上に变化したのは私たちの行動だ。毎日全国の感染者数を確認し、日常的にマスクをつけるようになった。大人数での集会は自粛となり、旅行や娯楽が制限された。この新型コロナウイルスの影響で環境に変化が起きたのは皇學館大学ボランティアルームも例外ではない。感染拡大を防止する観点から、ボランティアの募集を受け入れない状況が1年間続いた。その中でも学生スタッフは大きな成長を遂げることができた1年になったと私は思う。

皇學館大学判断によりボランティアのような学外の課外活動が禁止になると、スタッフは皆ボランティアルームの意義について考えた。“ボランティア活動を促進し続ける”というボランティアルームの目的について、どうすれば貢献できるのだろうか。私たちが出した方針は、来年度の活動に備えてボランティアに関する知見を深める時間にしようというものだった。これからのボランティア活動をより充実した内容にするため、今年度の1年間は学外での活動を行わず、学習の期間とした。

車椅子講座や手話講座はこれまでのボランティアルームにはない新たな活動である。講師の方をお呼びして自らが積極的に学びに向かう姿勢は、実践的な知識を得るだけでなく既存のボランティア活動の昇華にも繋がるだろう。自分たちが学びに励むことで、ボランティアに参加した一般学生に車椅子の使い方をレクチャーすることも出来る。この1年間に学んだ成果を現場で活かすことで、更なるボランティアの輪を広げることが出来るだろう。

今年度は環境が大きく变化した1年だった。世間の情勢や皇學館大学の現状、ボランティアルームの在り方が大きく変わり、今までの活動を見直す期間となった。車椅子講座や手話講座を通じて、私たち学生スタッフはこの1年間で大きく成長し、来年度迎えることが出来る。情勢が変化したからこそ得ることが出来た貴重な経験や専門的な知識は、これからのボランティアルームを明るい未来へと導いてくれるだろう。1年間の準備期間で深まった

知識を現場で活かすことができるか、日常の学校生活の中で一般学生に対しボランティアの魅力を発信できるかは今後の学生スタッフの努力次第である。学内でのボランティアルームの知名度の回復等課題は多いが、成長した彼らなら問題ないだろう。一人一人がこの1年間で身に付けた知識や技術はボランティアルームにとって大きな力となり、次のステージへと力強い一歩を踏み出す原動力となるだろう。

最後になりましたが、ボランティアの講習や受け入れをしてくださったボランティア関係者の皆様に教職員とともに心より感謝申し上げます。どうか今後とも変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

# 1. コーディネート状況報告



# 令和2年度ボランティアコーディネート 活動報告

## 1. 目的

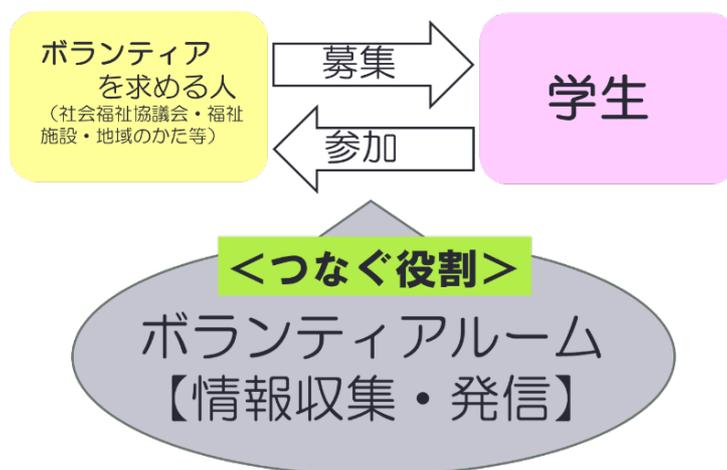
皇學館大学ボランティアルームでは、ボランティア活動を希望する学生の支援を目的として活動している。ボランティアルームに所属する学生スタッフが、ボランティアをコーディネートすることを中心に考えて活動をしている。そこで、ボランティアコーディネートについて今年度の活動を報告する。

## 2. コーディネート活動内容

ボランティアコーディネーターとしての学生スタッフの活動は、地域から依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生を繋ぐことである。

学生へのボランティア情報提供の方法は、主に2号館1階ボランティアルーム横と6号館1階の掲示板への掲示、メール登録者へのメール配信である。しかし、近年メール登録者数が減少しており、登録していてもメールをなかなか見ないという学生の声を聞いたことから、昨年度からメールに加え、さらに手軽にボランティア情報が手に入るとLINEでのボランティア情報配信を開始した。その他にもTwitter（ツイッター）やInstagram（インスタグラム）での企画ボランティアの発信や、平成28年度より行っている月別ボランティアに参加への情報発信をすることで学生の参加促進をねらっている。

## ボランティアルームの仕組み

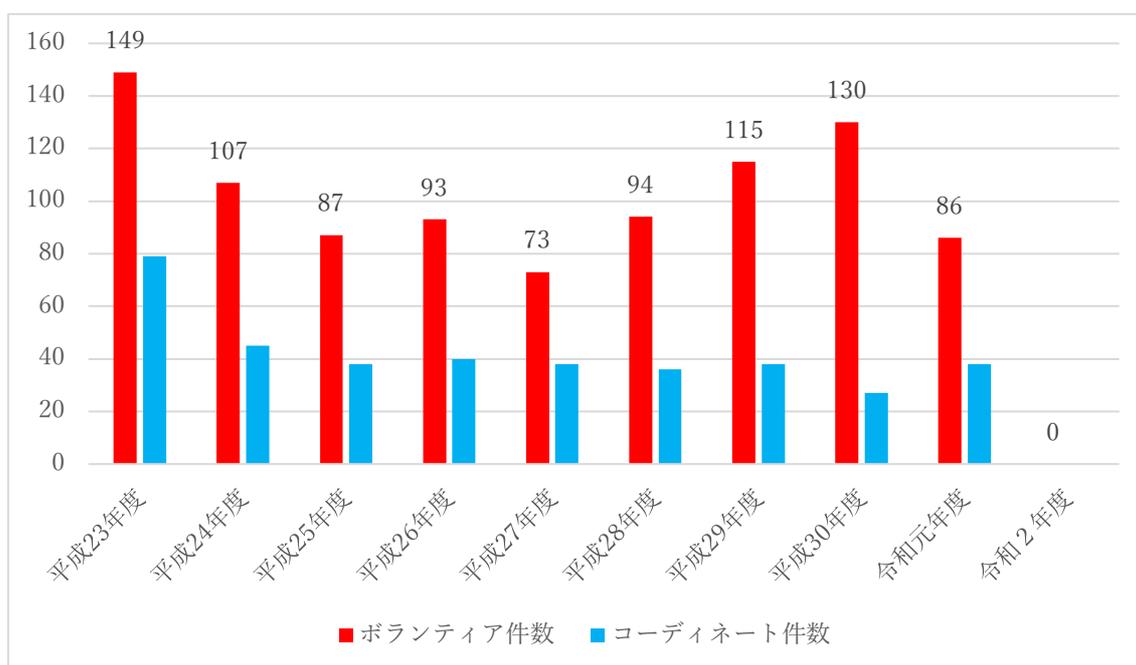


ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことにより、気軽にボランティアに参加することができ、学生のボランティアの参加をより促すことができると考えている。学生スタッフがボランティアコーディネートをを行うにあたって、気を付けなければならないこともある。それは、地域と学生との関係を対等かつ互いが成長できる関係へと調整することである。円滑にコーディネートをを行うために、学生スタッフ一人ひとりがボランティア先とはもちろんのこと、参加学生と連絡を取り合うことへの責任や意識を持ち、活動に取り組んでいく必要がある。

### 3. コーディネート状況

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、地域から依頼されたボランティア情報件数は0件であった。これに伴い、コーディネートすることはなく、学生のボランティア参加もないという結果になった。依頼件数に伴い、参加学生も0人となった。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると以下の通りである。



ボランティア依頼件数が0件というのは、ボランティアルームとして活動を開始した平成23年度以降、初めてのことになる。これは、新型コロナウイルス感染症の影響により多くの人が集まる催し物が開催できなかったことや、人と人との接触を控える傾向が社会的

に多くみられたことが理由として考えられる。この結果を踏まえ、ボランティアルームとして新たな生活様式に合わせて活動を行い、引き続きボランティアの魅力やその喜びを新たな学生に伝えボランティアの輪を広げていく必要がある。そして、ボランティア活動がいつ再開しても活動が円滑に行えるよう、学生スタッフ一人ひとりのスキルや意識を維持していくことが大切であると考え。

#### 4. ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみるコーディネート进行分析。今年度のメール登録数は2人、LINE登録数は26人、計28人と大きく減少した（昨年より164人減）。

この原因としては、新型コロナウイルス感染症により、例年4月に行われていた各学年のガイダンスが中止となったことによるアピール不足や、ボランティアルームとして校内での活動が困難であったことが挙げられると考える。

例年ガイダンス後にはメール登録用紙の回収や、LINE登録を行っていた。ガイダンスの際にメール登録やLINE登録の存在を知り、登録をしているという声も耳にする。ガイダンスの際には、各学年に合ったDVDも上映している。実際にガイダンスを通してボランティアに興味を持ったという学生もみられる。ガイダンスでアプローチができなかった点が、要因であるといえる。同時に、ガイダンスが学生に登録を促すための大きな行事であることを再認識し、ガイダンスでの取り組みを良いものにしていく必要があるだろう。

#### 5. 今年度のボランティアルームとしての活動

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、ボランティアに参加するということは困難であった。そのため、学生スタッフが自らのスキルアップを目指す活動を企画し、行っていった。ボランティアルームの活動の中心であるコーディネートについては、コーディネート経験のない1年生を含め、いつでも円滑にボランティア活動を再開できるように活動を進めた。主に高齢者との接し方や手話講座、福祉講座などを開催してきた。これらの活動の詳細は後の報告で担当が述べる。

今年度のボランティアルーム活動の特徴として、オンラインの活用を上げることが出来る。オンラインということで、直接人と会うことができないのは寂しいところだが、利点もあると考える。それは、遠方の方とも気軽に関わることが出来ることである。ボランティアに参加することは難しいが、ボランティアの楽しさを伝えて身近に感じてもらうという本

来のボランティアルームの形を忘れてはいないだろうか。ボランティアの良さ・素晴らしさを一人でも多くの学生に伝えるということを念頭に置いた上で、新たな生活様式に合わせた活動を行っていかねばいけない。

今後も、新型コロナウイルス感染症の影響によりボランティア活動に参加できない状況が続くと考えられる。引き続き、学生スタッフのスキルアップを目指していくことはもちろんのこと、この状況で行うことができる活動を模索していかねばならない。そして、ボランティアが再開した時にすぐに動けるよう、スタッフ間はもちろんのこと地域の方と情報を共有していくことが重要である。私達のボランティアへの想いがいつか大きな花を咲かせるように、スタッフ一同改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：文学部国史学科4年 渡辺楓】

## **2. ボランティアルーム企画・活動報告**



# 募金班 活動報告

## 令和2年7月豪雨募金活動報告

### 1. 目的

7月に熊本県を中心に九州地方や中部地方、東北地方などの各地で発生した豪雨により、死者84名、住宅被害16599件の広範囲に及ぶ被害があった。

甚大な被害を及ぼした災害であるにもかかわらず、コロナウイルスの影響で災害ボランティアの受け入れを断る自治体も多く、被災した地域の方だけでボランティアを募り生活再建を目指した。そこで、皇學館大学からも何か支援をできないかということでボランティアには行けないが、一番身近で被災された方々を誰もが支援することができる募金活動を行った。また募金を通して、学生の方々や大学に関わる全ての方々に、7月に豪雨災害があったことを再認識してもらうため活動を実施した。

### 2. 活動内容

#### 7月豪雨災害基金

実施日 : 令和2年 7月29日(水)、7月31日(金)

実施時間 : 12:40~13:10

活動場所 : 倉陵会館1階食堂前・6号館入り口付近

スタッフ : 4~6名

企画担当者 : 4年 中西正樹

3年 中西涼、西出美郷、森田麻友

2年 勝俣未結、黒田結規、森啓悦

1年 池下日和、城戸裕介

### 3. 活動報告

新型コロナウイルスの渦中に起こった7月の豪雨災害についての募金活動を行った。例年と違い、感染予防を徹底した活動が必要であったため、募金班だけの活動にして、ボランティアルームスタッフの追加招集を見送った。コロナ対策をして、大声の呼びかけも控えマスク着用し、新しい生活様式の募金活動を行った。

募金活動1日目は、例年通り倉陵会館1階食堂前と6号館入り口付近で行い、2日目は参

加スタッフが少なかったため倉陵会館1階食堂前の1箇所で行った。参加スタッフは各日程を半分に振り分けた。

また事前に倉陵会館1階食堂前と6号館入り口の活動許可の申請、コロナ対策の書類、募金によって集めたお金は全額日本赤十字社を通して被災地へ寄付するという内容の申請を提出した。そしてボランティアルームスタッフに、今回の豪雨災害基金が啓発できるよう事前に募金箱と看板を作成してもらい、SNSによる募金活動の告知等をした。

#### 4. 総括

7月豪雨災害に対して7月29日には5,582円、7月31日には4,867円の基金が集まり、合計10,449円を日本赤十字社に寄付することができた。今年度はコロナウイルスの影響もあり、災害発生から募金活動開始まで出遅れたため、SNSを通じた告知が遅れ、募金期間が短くなってしまったという募金班の動きに反省すべき点が多々あった。出遅れたにも関わらず、例年並みの募金額を集められたことは、やはり豪雨災害が全国的に起こったために災害を身近に感じた学生が多かったのではないかと考えられる。また今年度はボランティア活動が少なかったため、少しでも人のためになることをしようと考えた学生が多かったのかもしれない。

昨年度同様SNSを活用した情報発信が課題であったが、募金活動をSNSで知って来てくれた学生もいたため、やはり効果的に定期的にSNSを活用することで広く周知できるだろう。

募金活動を行い発見したことがある。それは学生の思いやりの心である。コロナウイルスの影響でアルバイトの時間が減り、給料が減った学生も少なくないだろう。その中で身近なボランティアとして、大切なお金を募金していただけるのは学生一人一人の思いやりの心が感じ取れる期間であった。

### 令和2年災害講座 — 「東日本大震災から10年」「みえボラパックについて」 —

#### 1. 目的

毎年のように日本各地で地震や豪雨、豪雪などが発生している。三重県に住む私たちは災害を決して他人事ではなく、いつ南海トラフ地震が発生しても対応できるように様々な知識を身につける必要がある。知識も必要であるが、災害を知ることから始めることも大切である。

2021 年は阪神淡路大震災から 25 年、東日本大震災から 10 年という節目の年でもある。本来ならば実際に足を運び五感で感じ、復興に貢献するのが本意であるが、今回は災害講座としてオンデマンド配信でボランティアルームスタッフを対象にこれまでの災害を再認識する機会を作ることにした。

## 2. 活動内容

始めに、オンデマンド配信のための動画撮影を行った。テーマは①「東日本大震災から 10 年」と②「みえボラパックについて」という 2 つを設定した。内容は①では東日本大震災を振り返り、10 年経った今、私たちにできることは何かを紹介した。②ではみえボラパックについてと災害が起きた際に、どのような行動をとるべきかの紹介をした。また、みえ災害ボランティアセンター長山本康史様の録画ビデオ出演にて、みえボラパックの過去の実績について紹介していただいた。それを編集し、YouTube を活用してボランティアルームスタッフだけの限定公開を行なった。

企画者 : 3 年 西出美郷、森田麻友  
2 年 黒田結規、森啓悦

撮影日 : 3 月 3 日

撮影時間 : 11:10～15:00

撮影場所 : 711 教室

撮影参加者 : 3 年 西出美郷  
2 年 勝俣未結、黒田結規、森啓悦  
1 年 池下日和、城戸裕介

視聴回数 : 災害講座① 15 回  
災害講座② 9 回 参加者 10 人

出演協力 : みえ災害ボランティアセンター長 山本康史様

写真提供 : みえ災害ボランティアセンター

## 3. 活動報告

ボランティアルームスタッフのスキルアップができるようにオンデマンド災害講座を作成した。初めて知る災害の内容等もあり勉強になった。

オンデマンド講座の参加者は10人だった。初めての試みにも関わらず、ルームスタッフに見ていただけたことは新たな経験になった。そして、新たにパワーポイントを使い、オンデマンド配信にすることで、いつでも、どこでも試聴できるということは、今後活かせる経験となった。

参加したスタッフからは、「改めて東日本大震災を知れてよかった」「家に帰れない人がまだいたんだ」などと、今の状況を知る機会となったことがわかった。

募金班オンデマンド配信を作成したスタッフからは、「ミーティングを重ねて、知識を蓄えることができた。」「それぞれが持つイメージで進めるのではなく、情報共有をもう少しすべきだった」といった反省もあった。

#### 4. まとめ

今年は阪神淡路大震災から25年、東日本大震災から10年、熊本地震から5年という節目の年であった。コロナウイルスに影響がなければ、被災地に足を運ぶことで復興に貢献できただろう。また7月に豪雨災害が発生したものの、災害から復旧するためのボランティアにも参加することができたかもしれない。

今回オンデマンド配信に初めて挑戦した。反省点も多く見つかった。私たち募金班は、災害が起きたら随時募金をすることが例年の役割である。募金班として伝えることは、過去を知り、後世の災害に生かすことである。南海トラフ地震が起きたときに大きな災害にあうかもしれない地域に住んでいるということは、日頃から災害は隣り合わせということ、一人一人が災害に関心を持つことがこれから非常に大切になるだろう。

【文責：教育学部教育学科2年 黒田結規】

# 福祉講座 活動報告

## 1. 目的

今年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、例年伊勢市社会福祉協議会が主催し、ボランティアルームと合同で企画・運営を行う「ちょこっと福祉体験」の開催を中止した。このような状況下で自分たちにできることとして、伊勢市社会福祉協議会が行う

福祉に関する講座から福祉について学ぶという「福祉講座」をボランティアルームで企画・運営を行い、ボランティアルームスタッフのみの参加という形にした。今年度は2回開催した。

このような活動の目的は主に3つある。1つ目は新型コロナウイルス感染拡大の影響により様々なボランティアが中止を余儀なくされている中、これからの福祉活動に活かすことのできる福祉活動に関する基礎的な知識を蓄えるということ。2つ目は福祉についての自身が持つ知識量を再確認し、自覚する機会であること。3つ目は伊勢市社会福祉協議会さんとの繋がりを深めること。この3つを目的として開催した。

## 2. 活動内容

福祉がテーマであることから講座は、第1回目は「ユニバーサルデザインについて」と「車いすについて」で実際に車いすを使用した実践も行い、第2回目は「視覚障がいについて」という内容で実際にアイマスクを使用した実践も行うという内容で開催した。

### 【第1回】

開催日：令和2年9月24日 15:10～16:40

場所：皇學館大学

内容：15:00 受付

15:10 ユニバーサルデザインについてのお話

15:40 車いすについてのお話・車いす体験

16:40 解散

【第2回】

開催日：令和2年12月24日 16:50～18:20

場所：皇學館大学

内容：16:50 受付

17:05 視覚障がいについてのお話

17:35 アイマスク体験

18:15 記念撮影

18:20 解散

企画者：4年 山川廣太郎

3年 樋口葵、森田麻友

2年 川端日南果、黒田結規、袖岡美菜、増井香苗

1年 河西一成、鈴木祥大、森知帆里

3. 活動の様子

【第1回】



車いす体験(段差)



車いす体験(スロープ)



集合写真

【第2回】



アイマスク体験



集合写真

## 4. 活動報告

### 【第1回】

今年度の福祉講座はボランティアルームスタッフのみの募集としていたため、参加者はボランティアルームスタッフ 19 名であった。

前半のユニバーサルデザインについてのお話の内容は次のとおりである。

- ・ユニバーサルデザイン(universal design=UD)の意味
- ・ユニバーサルデザインの7つの原則
- ・ユニバーサルデザインが求められる背景
- ・ユニバーサルデザインとバリアフリー
- ・まちの施設や身のまわりのユニバーサルデザイン
- ・こころのユニバーサルデザイン

後半の車いすについてのお話・車いす体験では、車いすの各部位の名称や状況に応じた使用方法、車いす利用者への声かけのタイミングなどを教えていただき、2人1組になり、実際に構内の段差やスロープを使用して実践を行った。

### 【第2回】

第2回目の福祉講座についてもボランティアルームスタッフのみの募集としていたため、参加者はボランティアルームスタッフ 14 名であった。

前半の視覚障がいについてのお話の内容は次のとおりである。

- ・視覚障がいの種類やその症状
- ・視覚障がい者の補助の仕方
- ・視覚障がい者のために作られた道具紹介

後半のアイマスク体験では、2人1組を作り講座の前半で学習したことを確認する形で皇學館大学内の階段や廊下を使用して実践を行った。

## 5. 参加者からの感想

### 【第1回】

- ・1人1人がこころのユニバーサルデザインを持ってほしいと思いました。
- ・車いすの動かし方では、車いすに座っている人の気持ちを第一に考える大切さを学びました。

## 【第2回】

- ・視覚障がい者の方の不安な気持ちや、出来ること、出来ないことへの理解が深まり、そのうえで支援者としてどのような気持ちで支援を行う必要があるかということが分かりました。

## 6. 反省

今年度の福祉講座の反省点は2つある。1つ目は事前準備の時間に余裕がなかった点である。準備をし始める時期が遅く、企画への参加についての声かけをする時期についてあまり猶予を持たせることができなかった。そのため、次回からは時間に余裕を持たせて企画の準備に取り掛かる必要があると感じた。

2つ目は第1回福祉講座での車いす体験の際にエレベーターを使用した実践を行うことができなかった点である。今回、車いす体験を開催するにあたり使用した教室がエレベーターから遠く、車いすでエレベーターを使用する実践を行うことができなかった。そのため、車いすを使用する実践を行う際はエレベーターを使用しやすい環境を確保する必要があると感じた。

## 7. まとめ

新型コロナウイルス感染拡大に対応して初の試みとなった福祉講座だが、伊勢市社会福祉協議会の皆様のご協力により1回の講座で学べる事柄が多く、また伊勢市社会福祉協議会の皆様とボランティアルームスタッフがコミュニケーションをとる機会も頻繁にみられ、非常に楽しい雰囲気で行うことができたと思う。また、自身の持つ福祉に関する知識の量を確認できる機会にもなり、この福祉講座を機に、これからの福祉関係のボランティア活動に活かすためのスキルアップに繋がっていきたいと考える。

最後になりましたが、今年度初の試みであり至らないところもあったにもかかわらず、要望も快く受け入れ、ご協力して下さった伊勢市社会福祉協議会の皆様に感謝申し上げます。

【文責：教育学部教育学科2年 袖岡美菜】

## 手話講座 活動報告

### 1. 目的

サマースクールは今年度で13回目の開催を迎える予定であったが、今回は新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して、開催することができなかった。

そこで、先生方や大学職員の方のお力をお借りし、ボランティアルームで考えたところ「コロナ禍の間にボランティアルームのスキルアップを目指そう」という目標ができた。それを基に、サマースクールメンバーも何かボランティアルーム全体に発信できないかと考え、私たちは手話講座を開くことにした。

この講座では、様々な言葉の手話を知るだけでなく、手話の重要性やどのような状況で役立つのか、また、手話利用者に対し、「どのように接すると、共生社会の実現に近づくのか」と考える機会、きっかけを持つことを目的とした。

### 2. 活動内容

内容は、初めにボランティア関連・学校関連と比較的、私たちに身近な言葉が覚えやすいと考え、その2つをテーマに計10個程度の言葉の手話を学習した。

次に、擬似体験をした。

こちらが考えた各班5名程度に分かれて、イヤホンや耳栓を付けることで聴こえない状態になってもらう人を1人選出して、私たちが考えたテーマの中から1つをランダムで選び、他のメンバーがそのテーマについてジェスチャーなどを普段より多く使用し、分かりやすくした上で会話をし、聴こえない状態の人はテーマは何だったのか聴こえない方の気持ちなどを知るためのものである。

第2回目は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から教室を使つての開催が難しい状況であったため、手話講座のビデオを作成し、期間限定でボランティアルームのLINEグループにオンデマンド型で配信をした。撮影場所は学食2階だった。内容は、まず冒頭に前回学んだ言葉を復習し、その後新たに言葉を10個程度つけ足して手話の言葉を学習した。その次に、覚えた手話を会話の中で使う様子を撮影した。

今年度行った手話講座では、手話を身近に感じてもらうことを前提に行った。第1回、第2回と2講座を開催し、第1回目はコロナウイルス感染拡大を考慮しながら、431教室を使用し、人との間隔を2メートルとつての座席配置で行った。

### 《第1回》

日時 : 令和2年10月29日(木) 16:50～(5講目)

場所 : 皇學館大学(431教室)

参加人数: サマースクールスタッフ:9名

ボランティアルームスタッフ:19名

内容 : ・手話体験  
・手話クイズ  
・聴覚障がい擬似体験  
・記念撮影

### 《第2回》

日時 : 令和3年3月8日(月)～4月15日(木)

撮影場所: 学食2階

参加人数: サマースクールスタッフ:8名

ボランティアルームスタッフ(感想を頂けた人数):11名

内容 : ・手話動画  
・会話の中での手話動画

## 3. 活動報告

今回は新型コロナウイルスの影響により、一般学生の参加はなしとし、ボランティアルームスタッフへの手話講座を代替措置として開催した。第1回は対面型で行った。参加者は、サマースクールスタッフ9名、ボランティアルームスタッフ19名の計28名であった。

まず、手話体験として、サマースクールスタッフが各自で覚えてきた手話を参加者に見せ、一緒に行った。難しそうにしている人にはスタッフが個別で指導したり、参加者同士で教え合う場面も見られた。次に手話クイズを行い、覚えられているかの確認をした。手話クイズでは、ボランティアルームスタッフの積極的な参加が見られた。また、ここでも忘れている人への声掛けや、スタッフ同士が確認する場面が見られた。

最後は聴覚障がいの擬似体験を行った。新型コロナウイルス感染拡大防止も踏まえ、各参加者にイヤホンを持参してもらい、グループに別れて、各班にテーマをひとつ提供し、イヤホンを1人だけがつけた状態で会話に参加して貰うという形で行い、耳が聞こえない、聞こえづらい状態での会話のしにくさを模擬的に体験して貰う意図で行った。体験後は参加ス

スタッフから口々に様々な意見が聞こえた。最後には新型コロナウイルスの感染拡大防止も踏まえ、座席に座った状態で記念撮影を行った。

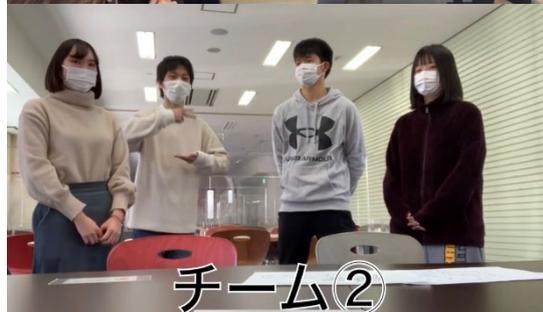
第2回目は新型コロナウイルスの影響からオンデマンド型での開催となった。サマースクールスタッフが集まって、手話講座の動画を作り、公開した。内容は、第1回で学んだ手話の復習に春休みに関連した手話を加えた手話の動画と、サマースクールスタッフがそれらの手話を使ってコミュニケーションを取る様子で構成し、第2回では新たに実際にコミュニケーションを取る事を目的とした。

#### 4. 活動風景



##### 【ノート】

両手を開いて  
本が開いた形を表します。  
そこに片手でペンの形を作り、  
文字を書く動作をします。



#### 5. 参加学生の声

##### 《第1回》

- ・手話を学ぶ機会は少ないと思うので、良い体験だった。
- ・貴重で有意義な時間だった。
- ・大きな達成感があった。
- ・耳が聞こえない人にとっての手話の大切さが疑似体験を通して身にしみて感じた。
- ・手話と疑似体験から言葉を上手く伝えられないもどかしさ、疎外感を実感した。
- ・聴覚障がいを持つ方が少しでも過ごしやすい環境を作るために、体験したことをこれからしっかりと活かしていきたい。

- ・積極的に関わってみようという気持ちになった。
- ・擬似体験では、今はマスクで話者の表情が読み取れないので、とても難しく感じた。  
新型コロナウイルスの意外な弊害を発見できた。

## 《第2回》

- ・冒頭に前回の手話講座の復習が入っており、前回の手話を思い出すことができとても良かった。
- ・オンデマンド型であることで、手話の手の動きなどを何回も見ることができ、よかった。
- ・春休みに何をしたかというテーマが、今の時期に合っていて良いアイデアであった。
- ・手話の解説だけでなく、様々な角度から手話の動きが見ることができ、とても分かりやすかった。
- ・解説と手話の動きの切り替えが少し早く感じた。
- ・画面の文字で説明がされていたので、音がなくても内容が十分に伝わった。
- ・自分たちが普段使っている言葉一つひとつに手話があって少しずつ覚えていきたいと思った。
- ・第1回、第2回と体験することで、目的のスキルアップが果たせた。
- ・手話には興味があったが難しそうだと感じていたが、手話講座を2回受けて、そんなに難しくないと思えた。もちろん1度しただけでは覚えられないが、少しずつ続けていけば覚えられるのではないかという希望がみえた。

## 6. 反省

今年度は、松阪社会福祉協議会さんと連携して行っているサマースクールを例年通りに開催することができなかつたため、ボランティアルームスタッフのスキルアップとして、手話講座を第1回は対面型、第2回はオンデマンド型で行った。

どちらも初の試みであり、サマースクールスタッフのみでの対応であるため、反省点がいくつか挙げられた。

特に以下の3点は次回から気をつけたい点である。

1つ目は、手話講座の内容や進行についてメンバー間での共有ができていないことが多くあったので、LINEのメッセージだけでなくリモートでのミーティングを重ね、確認し合うことが必要であった。

2つ目は、参加者に手話講座を行う目的を明確に伝えられていなかったもので、誰が聞いても伝わるような文章を原稿に含めるべきであった。そして、オンデマンド型に変更になった時点での書き換えも必要であったらう。

3つ目に全てのことを分担せず、同じ人に沢山の仕事を任せっきりになってしまっていたので、次は分担をして各自が行うことを明確にするべきである。

最後に、今回はボランティアルームのスタッフだけということで、3密を避けることで対面での開催ができたが、今後もコロナ禍においてどのようにして一般学生に参加してもらうか考えることが必要であると感じた。

## 7. まとめ

日常生活の中で「手話」に触れる機会は少なく、身近に感じないため、手話に関心を持つ人は多くないだろう。そんな中、今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、サマースクールが開催できなかったため、その代替案として手話講座を開催した。これはボランティアルームスタッフが手話に興味を持ち、手話について学ぶ良い機会となった。感想や意見からは手話を使う方への配慮等を考える姿勢が見られたり、聴覚障がいの困難さに触れる良い機会となった等の前向きな意見が出された。これらの意見から、今回の手話講座はボランティアルームスタッフが新しいことを学ぼうとする意識の向上にも繋がったと考えられる。この機会を活かし、これからもボランティアルームスタッフとして様々な活動に励みたいと思う。

また、今回の手話講座が対面型、オンデマンド型の2種類のかたちでの開催であったことや、私たちサマースクールスタッフが企画、運営をしたことにより、運営の難しさを知ると同時に、それによる達成感を味わうことができた。今後はボランティアルームスタッフだけの参加ではなく、学生ボランティアの参加も視野に入れていきたい。今回の反省点を見直し、今後の対策や内容の変更について考えを深めていこうと思う。今回のような手話講座をきっかけに手話を学びたいと考える人が増える機会づくりを行っていきたい。

【現代日本社会学部現代日本社会学科2年 土性奈々香  
教育学部教育学科2年 坂谷海怜  
教育学部教育学科2年 松岡克佳】

# くらたやま企画 勉強会 活動報告

## 1. 目的・目標

今年度は新型コロナウイルス感染症のクラスター発生を懸念して、昨年度までのような音楽祭や文化祭といったイベント企画を行うのは困難であるという結論に至った。そのため年間計画を一度見直して、今年度の企画の目的を一新し『ボランティアルームスタッフ（以下 学生スタッフと称する）のスキルアップ』と『介護付有料老人ホームくらたやま（以下「くらたやま」と称する）とボランティアルームのつながりの継続』の2つとした。

この目的を果たすために以下の2つを目標とした。

- ①高齢者の方や認知症の方に関する正しい知識をつけ理解を深める
- ②今までとは違う形でくらたやまの職員の方々と学生スタッフが交流できる機会を設ける

この二つの目的を果たすために、くらたやまの職員の方を講師としてお招きし、学生スタッフ向けの勉強会を実施した。

## 2. 活動内容

勉強会では、くらたやまの職員の方にパワーポイントのスライドを使いながら講義形式でお話していただいた。内容は「高齢者の方・認知症の方とのコミュニケーション方法」についてが中心であった。当日、会場である教室では感染症対策として、手指のアルコール消毒、着席する座席の指定、十分な換気を行いつつ勉強会を実施した。

実施日時など詳しい内容については以下の通りである。

開催日：令和2年11月26日（木） 16時50分～18時20分

場所：皇學館大学511教室

内容：16時50分～ 準備

17時00分～ 勉強会

18時00分～ 質疑応答

18時10分～ 後片付け

企画者：4年 渡辺楓

3年 池田千夏、中子恵里花、福島勇気

2年 須場聖羅、行方洸太、村上葵、森井洸樹

1年 小芝実結

### 3. 活動報告

今回の企画には、学生スタッフの1年生7名・2年生8名・3年生5名の計20名が参加した。加えて、講師としてくらたやまの職員の方3名にお越しいただいた。

まず勉強会を始める前に、参加者には手指の消毒をお願いし、あらかじめ決めておいた座席表に従って着席してもらった。窓や出入口の扉を少しずつ開けて終始換気も行った。

そして、17時から勉強会を開始した。初めに、くらたやまの施設について紹介があったのち、高齢者の方とのコミュニケーション方法について“言語的コミュニケーション”と“非言語的コミュニケーション”に分けて、コツと注意点を教えていただいた。次に、認知症の諸症状についてと、認知症の方との接し方について、良い例と悪い例を実演していただきながら教わった。その後、施設で行われている感染症対策と、施設利用者の方を笑顔にするための企画や工夫について、具体例を挙げながら紹介していただいた。また、お話には話の内容に沿ったクイズがあり、学生スタッフが解いて発表する時間も設けられていた。

話を全て聞き終えた後、質疑応答の時間を取った。最後に、くらたやまの職員の方3名へお礼の言葉を述べて終了、後片付けへと移行した。

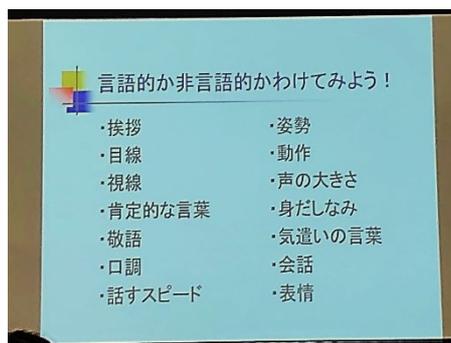
参加した学生スタッフにはパワーポイントの資料とは別にあらかじめ用意しておいた感想を書く用紙を配布し、今回の勉強会の良かった点・悪かった点など書いて提出してもらうようお願いした。この用紙は全員分揃ってから、くらたやまの職員の方にまとめてお渡しして簡易的なフィードバックを行った。

### 4. 活動風景



## 5. 参加学生の声

- ・講義で学ぶよりも実用的なことを知れたのでためになった。
- ・今回学んだことを今後の生活やボランティア活動で実践し、活かしていきたい。
- ・認知症についての知識が曖昧だったので、とても勉強になった。
- ・今回学んだような具体的・実用的なことをもっと知りたいので、また開催してほしい。
- ・ボランティア活動が再開した時、今以上に知識のある状態で活動出来るよう、今回学んだようなことをさらに勉強したいと思った。



## 6. まとめ

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受けたため、昨年度までの企画とは内容も目的も全く違った活動を行うこととなった。これまでのくらたやま企画では施設利用者の方と一般学生・学生スタッフとの交流が主であり、くらたやまの職員の方と学生スタッフだけの交流は非常に少なかった。しかし、今回の参加学生の声を受けて、このような交流の機会も求められていることが分かった。

結果としては、勉強会を実施したことで今年度の企画の目的である『ボランティアルームスタッフのスキルアップ』と『介護付有料老人ホームくらたやまとボランティアルームのつながりの継続』のどちらも果たすことができた。来年度も活発な活動が行えるか定かではないが、今年度の経験を活かしながら自分たちに出来ることを模索して取り組んでいきたい。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 2年 村上葵】

## 倉陵祭担当（パラスポーツ） 活動報告

### 1. はじめに

本年度は新型コロナウイルスの影響で倉陵祭が中止となったため、スタッフ間でのスキルアップを目標として新たな企画を実施した。今回倉陵祭担当が行ったのは、パラスポーツの中の「ゴールボール」という競技だ。ゴールボールは、アイシェード（目隠し）を着用して鈴入りボールを転がすように投げ合って、相手ゴールにボールを入れる競技である。

### 2. 目的

この活動を行う目的としてまず、「障がいをお持ちの方への理解を深める」というのが挙げられる。我々ボランティアルームスタッフは、ボランティア活動の中で身体に障がいを抱えた方と接する機会があるかもしれないが、（今回は視覚障がいのある方のスポーツを行うことで、視界が狭まることへの不安感、目が見えないときに求められる補助などを自分の経験と重ねて気づくことができると考えている。次に、「スタッフ間の交流を深める」というのも目的の一つである。本年度は新型コロナウイルスの影響を受け新入生歓迎会などの交流の場がなかったため、他学年はおろか、新入生のスタッフ同士がお互いを認知できていない状態にあった。今回の企画によって、少なくともチーム内での交流は必須であるため、我々スタッフ同士の交流を深めることができると考えた。

### 3. ゴールボールになった経緯

担当スタッフ全員で行いたい競技を挙げていき、投票の結果本競技を行うことになった。

### 4. 活動日時・場所・参加人数

令和2年12月6日（日） 10:00～13:30

皇學館大学体育館 サブアリーナ

参加人数 17人（スタッフのみ）

### 5. 活動内容

次のような形で試合を行った。

- ・1チーム：3～4人、計5チーム

- ・試合時間：8分
- ・試合形式：5チーム総当たり
- ・ルール：公式ルールに則る
- ・コロナ対策として観戦中密接・接触を避け、得点時の声援の代わりに拍手で代用した。  
試合中点が入ると審判である倉陵祭担当のスタッフが笛を鳴らし、笛の鳴った回数によってゴール・場外・終了が表された。

また会場に消毒液を設置し、使用する道具の定期的な消毒と、参加者に常に消毒をするよう声かけをした。

参加者は各々感染対策に協力してくれて、結果配慮しつつも静かすぎない、楽しい競技になった。

## 6. 参加者の意見

「視覚を使わないスポーツは初めてで新鮮だった」

「目が見えない中でのスポーツは怖かった」

「他のパラスポーツにも興味が沸いた」

「目印が大きな助けになった」

## 7. 目的の振り返り

まず「障がいをお持ちの方への理解を深める」という点だが、参加者の感想にもある通り、「怖い」と感じたことや目印の重要性を感じたことによって、視覚障がいをお持ちの方が普段体感していることを同じように体感し、理解を深めることができたのではないかと考える。

次に「スタッフ間の交流を深める」という点だが、参加者に協力してもらったアンケートでは、そのほとんどに交流を楽しめたという意見が見られたことから、上記の目的も達成できたのではないかと考える。

## 8. まとめと感想

今回実施する上で、接触の対策はあらかじめ考案してあったためスムーズであったが、声援をあげることができず必要以上に静まってしまうことを考慮できていなかった。今回は先輩方からの提案があり拍手という形に落ち着いたが、競技のことばかりを考えすぎるあ

まり目的の 1 つである交流という点において適切とは言えない物静かな場になってしまうところであった。体験そのものの成功は間違いなく大事なことであるが、実施する上での目的や目標を見失わず達成することも同じくらい大切であると思った。

## 9. 活動の様子



試合前



試合中の様子 1



試合中の様子 2

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 2年 村林凌樹】

# 他大学視察 活動報告

## 1. 目的

愛知淑徳大学のコミュニティー・コラボレーションセンター、通称 CCC と交流し、それぞれの活動紹介、ボランティアについての考え方や、参加者の意見などを参考にして良い活動につなげていくために行う企画である。そして主に視察に行くのは新入生に参加してもらいボランティア、皇學館ボランティアルームに対してより広い視野、考え方をもち活動してもらう目的もある。

## 2. 活動内容、報告

今年度はコロナ拡大防止のため中止となった。

## 3. 前回の愛知淑徳大学 CCC との交流内容

- ①自己紹介
- ②各大学の紹介
- ③各機関の紹介
- ④アイスブレイク【他己紹介：名前、これまでに参加したボランティアなど】
- ⑤グループディスカッション【ボランティアの良さや必要性を一般学生に伝えるにはどうしたらいいか】
- ⑥まとめ

## 4. まとめ

今回の他大学視察はコロナ拡大防止により中止となり、目的の一つである「新入生にボランティア、皇學館ボランティアルームに対してより広い視野、考え方思っ活動してもらう」ことができなかつた。そのことから、来年度は zoom 等のオンラインでの開催も視野に入れて活動するよう考えている。

そして、来年度は新一年生だけでなく、今まで参加できなかったスタッフに参加してもらいボランティアルームのさらなる発展に繋げていきたい。

最後に、この企画に協同いただく愛知淑徳大学 CCC 担当の秋田さんはじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。今後も、皇學館大学ボランティアルームがより一層精進していくためにも、交流お願い致します。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 2年 八尾 幸哉】

## 季刊誌 活動報告

### 1. 目的

季刊誌は学生用と外部用の2種を作成し、ボランティアルームの存在や活動、ボランティアについての情報発信を共通の目的として内容を考えている。

皇學館大学の学生用季刊誌にはボランティア情報や参加した学生の声、ボランティアや福祉に関する知識の説明を入れ、初めてボランティアをするという方やボランティア経験者の方、ボランティアに興味がある方など幅広い学生にボランティアの参加を促すことを目的としている。社会福祉協議会等を通じて配布している外部用の季刊誌には、ボランティアルームの概要や活動内容を中心にボランティアルームの存在や活動を知ってもらえるような内容にしている。

### 2. 活動内容

季刊誌を発行するにあたってミーティングを行い、担当者と相談しながら年間予定を立てた。季刊誌の各担当同士でどのような内容にするのか、情報共有をしながら、学生用（夏号・冬号）2号、外部用（夏号・冬号）2号を発行した。春号を作成予定ではあったが、号外という形に変更して新入生等に発行した。学生用は昨年度の発行数をそのまま引き継ぎ今年度も30部発行することに決めた。昨年からは始めたボランティア経験者のインタビューを取り入れ、今年度からは、福祉やボランティアのための知識も掲載し、ボランティアについて興味を持ってもらえるような工夫を考えた。

外部用の季刊誌は三重県社会福祉協議会、松阪市社会福祉協議会、伊勢市社会福祉協議会、伊勢志摩バリアフリーツアーズセンター、四日市市社会福祉協議会の5団体に向けて10部ずつ発行した。誰が見ても分かりやすいような内容を心がけた。また、新型コロナウイルスの影響によって行動ができなくなったことによる学生スタッフのスキルアップ活動の様子や、ボランティアルームの紹介、ボランティアの依頼方法などを掲載した。

学生用を発行する際には、Instagram や Twitter など SNS を通じてアカウント班によりアプローチを行った。昨年度同様、季刊誌に対する学生の反響を知るためにアンケート担当に質問の依頼をした。

### 3. 活動報告

学生用	発行月	発行部数	残部
夏号	8月	30部	14部
冬号	12月	30部	17部

今年度も2号館1階のボランティアルーム前と6号館1階の掲示に設置して学生が自由に手に取れる形で配布した。学生用の残部数を見ると、夏号、冬号ともに10部以上残ったという結果になった。

今年度も発行予定の時期を少し早めに設定したが、新型コロナウイルスの影響により開校、授業開始が遅れてしまい夏号の発行も遅れてしまった。また、他の号の発行時期もずれて当初の予定と大きく変わってしまった。担当者同士の話し合いが制限されてしまっていたことが影響していると考えられる。作成を担当者だけに任せるのではなく、グループで積極的にコミュニケーションをとって協力しながら作成しなければならないと感じた。今年度は担当者の中でペアを3組作り、学生用と外部用でそれぞれ1人ずつ作成にあたったため、グループ内での相談や共有が少なかった。そのため、グループ内で作成段階や内容の共有を増やしたり、作成者同士だけでなく、学生スタッフ全体にどのような内容を季刊誌で取り上げるべきか聞いてみるなど、もう少し作成面で改善点が必要だと感じた。

### 4. 反省と課題

#### 1) 発行部数について

昨年度

学生用	発行部数	残部
夏号	30部	1部
秋号	30部	19部
冬号	30部	28部

今年度

学生用	発行部数	残部
夏号	30部	14部
冬号	30部	17部



学生用の発行部数は昨年度同様30部にしたが、昨年度と比較すると残部は少ないものの昨年度の夏号の残部に比べるとやはり多く感じる。今年 Instagram でアプローチをかけたが、あまり効果がみられなかった。もう少し SNS でのアプローチ方法を考えていかなければ

ばならない。掲載する際の工夫がさらに必要なのではないかと思う。

外部用は5団体に10部ずつ発行したが、どのくらい団体によって必要かを相談し、配布する数を変えていく必要があると思う。そのため、各社会福祉協議会へ訪問する際に聞いておく必要がある。

## 2) 内容について

より良いボランティアの情報誌を目指していくために、学生用は学生が知りたい、知ってよかったと思えるボランティアや福祉の情報や掲載方法を季刊誌の担当者を中心として考えていきたいと思う。

学生がボランティアや福祉でどのような情報が知りたいのか、求めているのかを季刊誌のグループでもアンケートを重ねて検討していきたい。

外部用には昨年度同様にボランティア経験者のインタビューを引き続き掲載していくのが良いのではないかと考えている。

## 3) 配布方法について

今年度の残部は昨年度と比較してもあまり変化はなかった。今までと同様に紙媒体のみの発行であったが、InstagramやTwitterのようなSNSでの情報発信も活発になってきているため、PDFを用いた電子媒体でも掲載し、携帯やパソコンからでも気軽に季刊誌を読めるような工夫をしていきたい。外部用について社会福祉協議会5団体から配布箇所を増やすかということも検討していきたい。

## 5. まとめ

今年度は昨年度を参考に発行部数や掲載内容を考えた。掲載内容や配布方法については改善点が多くあると考えている。また、担当者で集まる機会が今年度は1度であったため、深く意見を出し合うことができなかった。そのために、担当者全員が集まる機会を多く作り、意見の交流の場を増やし、全員が納得できる季刊誌にしていきたい。「分かりやすく読みやすく！」を追求し、見る人のニーズに合った季刊誌を目標に作成していきたい。

【文責：教育学部教育学科2年 清水美玖】



### **3. アンケート報告**



## 令和2年度アンケート報告

### 1. 目的

今回のアンケートは、『新型コロナウイルスの流行を受け、活動が困難な状況の中でボランティアルームとして学生とどう関わっていくかを図る』、『現在の学生にとってボランティアルームに求められるものは何かを知り、今後の活動に活かしていく』の2つを目的として調査を行った。

### 2. 活動内容

今年度はアンケートの回答をすべて Google フォームに統一し、回答ページへの QR コードを載せたプリントを各学年・学科の講義で配布した。昨年に引き続き紙媒体の物も作成したが、期間中、一般学生のボランティアルームへの入室はなかったため、こちらでの回答は無かった。

今年度は新型コロナウイルスの影響により一般学生にボランティアを紹介することができなかった。そのため、昨年度までのアンケート項目を一新し、新しいアンケート項目として、ルーム内で行った取り組みの中で参加したいものを問う項目を追加した。また、本学の学生がボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームは学生とどのような形で関わっていくべきなのかなど、ボランティアルームの指針に関する項目は昨年度のままにして、アンケートを行った。

アンケートの実施は以下の通りである。

開催日 : 2020年12月21日(月)～2021年1月29日(金)

対象者 : 教育学部1年・2年・3年 約450名

文学部 約250名

現代日本社会学部 約100名

合計 約800名

方法 : Google フォームでアンケートを作成。また、Google フォームのリンクを載せた QR コード用紙を配布許可が取れた講義で配布。

アンケート内容 : アンケート項目は以下の10項目である。

①学年

②学科

- ③ボランティアルームの認知度
- ④季刊誌の認知度
- ⑤ボランティア情報の入手方法
- ⑥今年度のボランティア参加数
- ⑦参加してみたい取り組み・その具体例
- ⑧今後参加してみたいと思うボランティア
- ⑨ボランティアに対する考え
- ⑩ボランティアルームへの意見、要望、改善点

### 3. 結果報告

教育学科約 450 名、国文学科約 150 名、現代日本社会学科約 100 名、コミュニケーション学科約 100 名の合計約 800 名にアンケートを行った結果、得られた回答数は計 202 件だった。昨年度のアンケートは 18 件、一昨年アンケートは 38 件であり、件数は大きく増加している。

今回得られた 202 件の回答は、新型コロナの状況下におけるボランティアルームの活動に関わる貴重な意見である。

以下、得られた結果を順に示していく。なお、【複数回答可】のある項目はグラフの割合が全体（202 件）に対しての回答数なので、合計しても 100%にはならない。

① あなたの学年を選んでください。

1 年	34 人
2 年	51 人
3 年	111 人
4 年	6 人

② あなたの学科を選んでください。

神道	1 人
国文	33 人
国史	2 人
コミュニケーション	14 人
教育	139 人
現代日本社会	13 人

学年は「3 年生」「2 年生」「1 年生」の順に多く、学科では「教育学科」が他の学科よりも抜き出て多い結果になった。

今回のアンケートでは QR コード用紙を用いて集計を行ったが、講義内で回答までしてい

ただけた講義と、用紙を配るだけに留まってしまった講義があった。配るだけに留まった講義は、実施期間が卒業論文や講義のテストが集中してくる期間と被ってしまい、アンケートに時間を割くことができなかったと考える。

また、必修科目等、人が多く集まる講義はオンラインに移行してしまい、全体でまとめて集計をすることが難しかった。

今回のアンケートでは作成期間を早め、余裕を持って用紙の配布を行い、集計する必要があると考える。

③ ボランティアルームを知っていますか。

はい	177人
いいえ	25人

③-2 「はい」と答えた方に質問です。メールやSNSなどでボランティアルームに登録していますか。

はい	54人
いいえ	122人

ボランティアルームの認知度と登録の項目では、認知度は「はい」が多数、登録は「いいえ」が約70%の結果となった。

今年度はガイダンスでの紹介ができなかったため、1年生などにボランティアルームを知らない学生が多いと予想していたが、回答の約90%は「ボランティアルームを知っている」と答えた。あとの約10%の学生にボランティアルームを認知してもらえるよう、掲示物の更新や、SNSでの活動報告など、情報の拡散をより積極的に行っていくべきである。

登録に関しては、ボランティアルームに登録する機会が少ないことと、「ボランティアルームを知っている」と回答した学生が多かったにもかかわらず、「登録していない」と答えた学生が多かったことが課題である。

登録の機会に関しては、ボランティアルームの登録はガイダンス資料のパンフレット、ボランティアルーム横と六号館の掲示がある。しかし、ボランティアルームに足を運び、そこで初めて登録する、というパターンもある。このことから、ボランティアに興味がある学生であっても、一度機会を逃せばボランティアルームに登録しないままにしていると考えら

れる。

「ボランティアルームを知っているが登録をしていない」という学生は、大きく分けて「ボランティアに興味が無い、あるいは自分には必要ない」と考える学生と、「ボランティアルームに登録したいが、登録したら必ずボランティアに参加しなくてはならないのではないか」とボランティアの参加を強制されることを警戒している学生に分けられる。

「ボランティアに興味が無い、あるいは自分には必要ない」と考える学生に対しては、ボランティアに参加することで得ることのできる報酬の提示が必要である。「面接でアピールできる」や「エントリーシートに書くことができる」など、直接学生の利益になるような呼びかけも考えていかななくてはならない。

ボランティアの強制参加を警戒している学生に対しては、ボランティアルームの正確な情報を伝えるために、説明会を開く必要があると考える。コロナの影響下にあるからこそ、昨年度の「hello ボランティア」のような取り組みを大々的に行い、少しでもボランティアルームのことを知る機会を作るようにしていくべきであるとする。

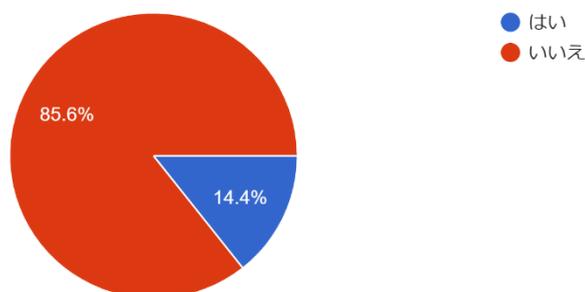
ガイダンスでの宣伝が縮小されてしまっている現在の状況だからこそ、新しい登録の機会をルームスタッフ内で考えていく必要がある。

④ ボランティアルームの季刊誌を知っていますか。

はい	29 人
いいえ	173 人

4. ボランティアルームの季刊誌を知っていますか。

202 件の回答



全体の約 85%が「いいえ」と回答した。昨年度のアンケートでも「知っている」と答えた学生 7 人に対して、「知らない」と答えた学生は 11 人でわずかに「知らない」が上回って

いたが、母数が増えたことでさらに差がついたと考えられる。

季刊誌に関しは、手に取る機会が少ないことと、発信力の低さが課題である。

新年度のガイダンスのパンフレットに号外を挟んでいるが、そこまで細かく見ている学生はまれであるとする。約 14%の学生が「はい」と答えていることから季刊誌の存在は決して無駄ではないことが分かるが、オープンキャンパスや倉陵祭に合わせて号外を作成し、配布するなど新たにアプローチしてみることも必要であるとする。

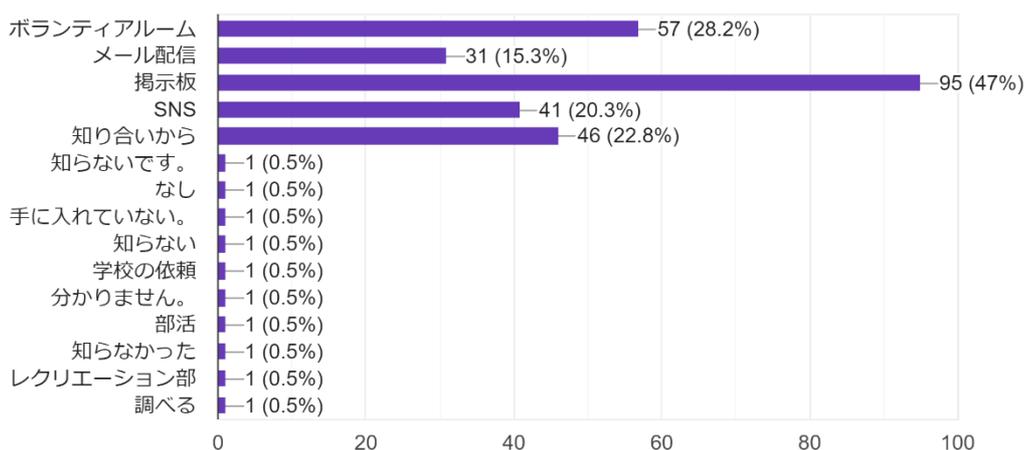
また、発信力の低さは、季刊誌を食堂や六号館下で配布する活動や、新刊が発行されたときに SNS を用いてアピールする方法が案として挙げられる。食堂や六号館下での配布はコロナウイルスの収束がつかなければ難しいが、SNS を用いた発信は、新刊が発行されたときや回収する一週間前など、何度も発信していくことが重要であるとする。

また、新型コロナウイルスの影響で、例年通りの内容では不足があるとの意見もルームスタッフ内であった。思うように活動ができない状況で、季刊誌はどのような情報を伝えていくのかを整理していきたい。

#### ⑤ ボランティア情報は普段どこで手に入れていますか。【複数選択可】

#### 5. ボランティア情報は普段どこで手に入れていますか。【複数回答可】

202 件の回答



今回は「掲示板」が最も多い回答となった。学内掲示は様々な連絡で用いられ、学生も頻繁に確認するため、掲示板を用いたボランティア募集は学生の目に留まりやすいことが予想される。ボランティアルームでも、募集要項を印刷するのではなく、手書きの掲示を作っ

ているが、短い時間で印象に残りやすくするためにも、手書きの掲示は続けるべきである。

「ボランティアルーム」は「掲示板」を除いた他の選択肢よりも少し多かった。学生はボランティアルームを利用して情報を得ていることを再確認し、発信していかなければならないと考える。

「知り合いから」の選択肢も多かったが、ボランティアに興味のない学生が情報を得るとすれば、友人など周りの人から誘われることで、きっかけになることが多いと考えられる。パラスポーツ体験など、一般学生が他の友人を誘いやすいような取り組みを行うことで、改めてボランティアに興味をもつことができる可能性がある。

⑥ 今年度、ボランティアに参加しましたか。

はい	24 人
いいえ	178 人

今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、ボランティアに参加したという学生は少なかった。しかし、24 人はボランティアに参加しており、自分で今できることをしている学生もいることが分かった。ボランティアルームや大学を介さずに、個人で行うことのできる清掃ボランティアなどに参加した学生が多いと予想される。

コロナの影響下ではボランティアの情報を得られる手段が限られていた。学生が取ることのできる手段としては、社会福祉協議会や友人から情報を得ていたと考えられる。

緊急事態宣言解除後の社会福祉協議会では、個人に向けたボランティア募集や情報の発信を行っているところもあった。ボランティアに参加する意欲のある学生ならば、社会福祉協議会のホームページから情報を確認していたと考える。

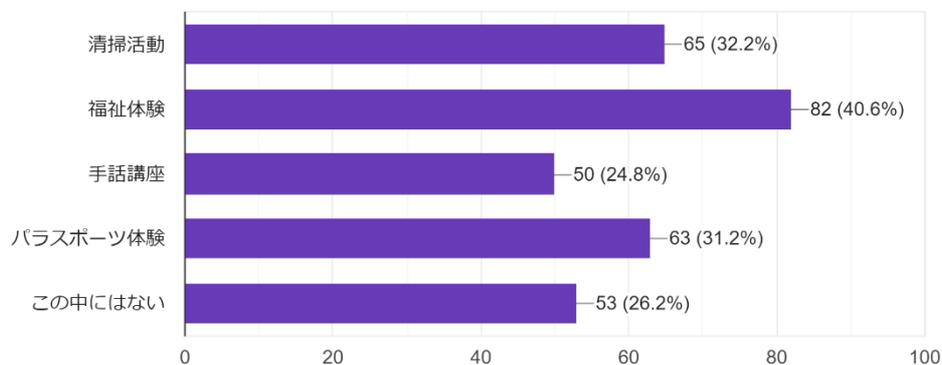
友人から情報を得た学生は、上記の社会福祉協議会の情報を手に入れた学生や、個人で活動している学生に誘われた形でボランティアに参加したものだと考えられる。このように、友人・知人同士からボランティア情報を広げていくことができるような環境作りも、ボランティアルームは行っていかななくてはならない。

これらの、ボランティアに積極的な学生のサポートをしつつ、ボランティアに参加したいと思っている学生を徐々に増やしていくことが、今後のボランティアルームが取り組んで行くべき指針である。

⑦ 次の中に参加したい取り組みはありますか。【複数回答可】

7次の中に参加したい取り組みはありますか。【複数回答可】

202件の回答



⑦-2 このような活動があれば参加したい等、具体的な意見がある方はお書きください。

【記述】

- こどもたちキャンプの運営みたいなの
- 子どもと関わる活動
- 人の役に立ちたい
- 挨拶
- 自然・子どもが絡んだボランティア
- 伊勢市駅前でお茶配り
- 幼児関係・障がい児支援関係
- 保育関係
- 地域活性化活動

今年度、ボランティアルームが独自で行った取り組みの中では、「福祉体験」が他の取り組みよりも回答数が多かった。理由としては、近年、東京オリンピックを意識したバリアフリー、ユニバーサルデザインがニュースで取り上げられていることや、トレンドになっていることが挙げられる。

また、⑨の項目でも触れるが、学生がボランティアを「自身のスキルアップ」として考えていることも理由であると考えられる。車いすの押し方やお年寄り体験など、具体的に身に

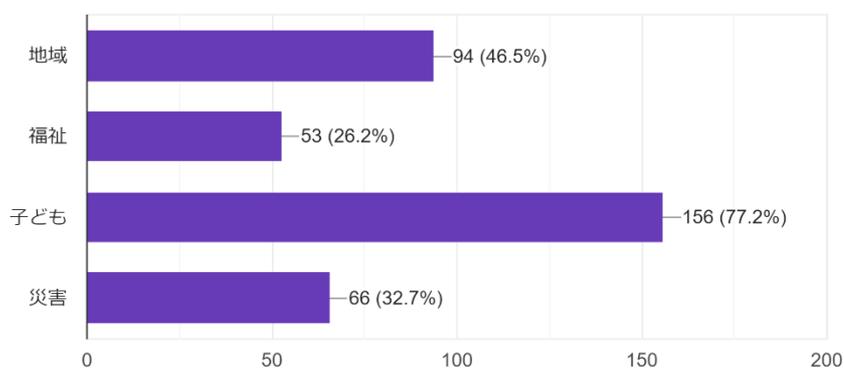
つけたスキルを活かすことのできる取り組みを求めているのではないかと推測する。

具体的に参加してみたいと思う活動では「自然・子どもが絡んだボランティア」や、「挨拶」などの子どもたちと関わる活動と、「伊勢市駅前でお茶配り」など、地域に関するボランティアの二つに分かれた。伊勢市内の学校と連携して地域の清掃活動など、地域と子どもが関わる取り組みをアピールしていくことが、学生のボランティア参加率向上につながると考える。

⑧ あなたが今後参加してみたいと思うボランティアはどれですか。【複数回答可】

8.あなたが今後参加してみたいと思うボランティアはどれですか。【複数回答可】

202件の回答



ボランティアの種別としては、「子ども」のボランティアが最も多く、次に「地域」が多いという結果となった。

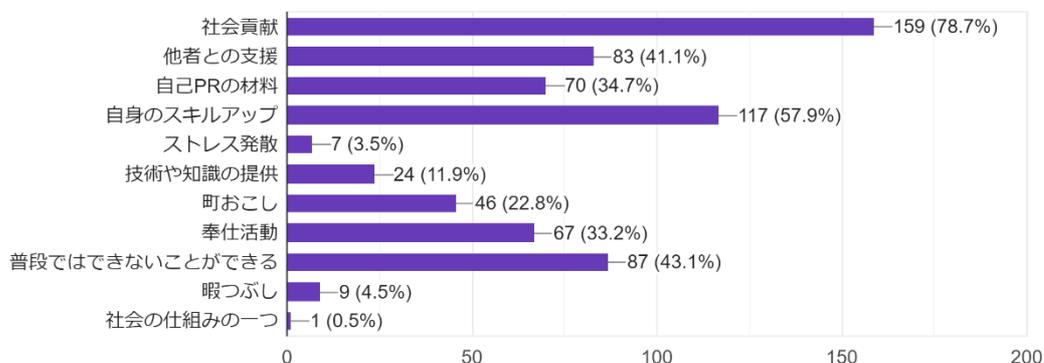
⑦-2の項目でも触れているが、具体的な意見では「子ども」に関するものが多い。今回のアンケートでは、教育学科の学生に多く回答していただいたということもあり、「子ども」のボランティアに参加してみたいと思う学生が多いという結果になったと考えられる。また、「地域」に関しても⑦-2で具体的な意見が出ており、学生の中ではこの二つがボランティアへのキーワードになっていると推測される。

しかし、⑦-1では「福祉体験」が最も多い回答であるにもかかわらず、参加してみたいボランティアでは最も少ない回答数であった。福祉体験と福祉のボランティアでギャップや、敷居の高さを感じる学生もいるのかもしれない。このようなギャップを取り除いていくことも、ルームスタッフの解決すべき課題であると考えられる。

⑨ あなたはボランティアをどのように考えていますか。【複数回答可】

9.あなたはボランティアをどのように考えていますか。【複数回答可】

202 件の回答



「社会貢献」と「自身のスキルアップ」が100件以上の回答数だった。

「社会貢献」に関しては、清掃活動や、災害支援など、ボランティアの一般的なイメージとして選択した学生が多かったと推測される。

昨年度のアンケートでは「自身のスキルアップ」の項目はそれほど多い回答数ではなかった。しかし、今年度は思うように活動に参加できないという状況であったため、ボランティアが自分を磨く場の一つであったことを学生が再認識し、「自身のスキルアップ」の回答数の増加につながったのだと考えられる。

ボランティアルームを通して「社会貢献」と「自身のスキルアップ」が感じられるような企画の立案や、ボランティアのコーディネートを行ってほしい。

⑩ ボランティアルームに対する意見や要望、改善点などがあればお願いします。【記述】

- これからも頑張って下さい。
- 昨年度だが、ボランティアをしたくて伺ったときの対応が非常に悪かった。参加したいと思っていたボランティアについて改めて連絡すると言われて連絡を待っていたが全く音沙汰無く。ボランティアをしたいと思っている人は少なくないと思うので、そこらへんの対応の仕方をもう少し見直してほしい。
- ボランティアの情報が伝わりづらい・LINE登録したけど、情報が来ない
- 今まで通り情報提供を続けて欲しいです。

情報提供を望む声や、激励の言葉もあったが、最も重く受け止めるべきは上から二番目の

「対応が非常に悪かった」という声である。昨年度の話であってもこのことはルームスタッフ内で共有し、スキルアップ講座などで一般学生の対応方法、情報共有の重要性を示すべきである。

ボランティア情報の伝達手段としては、LINE、Twitter、Instagram を中心に行っているが、新型コロナウイルスの影響でボランティアルーム自体が活動できなかった時は、全く情報を伝えることができなかった。ボランティアがないので情報が拡散できない、ではなく、ルーム内での活動や取り組みを発信し、ボランティアルームが現在どんな活動をしているのかを明確にしていくべきである。

#### 4. まとめ・反省・今後の展望

〈まとめ〉

今年度は、昨年度までの紙媒体と SNS 等を用いたアンケートの実施方法を変更した。変更後の実施方法は、スマートフォンで、配布した用紙の QR コードを読み込み、回答という形となった。

変更理由は二つあり、一つは、今年度は新型コロナウイルスの影響により学生がボランティアルームに入ることができない状態であり、来室者に紙媒体でのアンケートを直接渡す機会が無かったことである。スマートフォンの通信速度や充電の問題で、紙媒体も何部か必要とされると予想されたが、それらを使う機会は無かった。

もう一つは、SNS 等で呼びかけるよりも、直接用紙を配布した方が回答数の増加が見込めると考えたからである。昨年度は、毎週、ボランティアルームの SNS アカウントでアンケートへの協力を呼びかけたが、SNS だけで得られた回答数は 16 件であった。このことから、SNS で間接的に協力をお願いするよりも、対面で直接お願いした方が学生に回答していただけるのではないかと考え、今回のような形になった。

変更した結果として今年度のアンケートで良かった点は、202 件の回答が得られ、大幅に回答数が増加したことである。このことから学生の求めるボランティアの種類や傾向を考えることができた。また、⑨の質問のように、回答数が増えたことによって、同じ選択肢でも昨年度までとは全く違う結果になった質問もあり、データがよりはっきりとしたものになった。

集計方法を統一することで、ルームスタッフへの説明が容易にできる、集まったデータをまとめやすいという利点もあり、QR コードを用いたアンケートは来年度も引き続き行いた

いと思う。

質問内容に関しては新型コロナウイルスの影響により、去年のものから多く削減した。具体的には、月別ボランティアや参加したボランティアへの感想などの質問項目を取りやめ、学生がどのような情報を求めているのかを中心とした質問を新たに作成した。

結果としては、ボランティアルームが多くの学生に認知はされていることがアンケートからわかった。また、多くの回答が得られたことによって⑤の「ボランティア情報は普段どこで手に入れていますか」という質問や、⑧の「あなたが今後参加してみたいと思うボランティアはどれですか」という質問で正確性のある統計が得られたと思う。

今回得られたデータは次年度以降にも引き継ぎ、同じ内容の質問はグラフ化することでそれまでの変遷がわかりやすいようにして、ボランティアルーム改善の参考にしたい。

〈反省〉

集計方法の反省点としては、QRコードでの回収にこだわるあまり、実施期間が学期末になってしまったことである。講義後に用紙を配ることから、先生方にアンケート配布の許可をお願いしたが、テストや重要な連絡と重なるため許可を得られないこともあった。

もう一つの反省点として、配布した講義がルームスタッフの受講しているものであったため、回答していただいた学科が偏ってしまったことがある。結果として、約70%が教育学科の回答になってしまい、神道学科や国史学科の回答は1件と2件になってしまった。また、1年生や2年生の必修科目はオンラインでの開講になっている学科も多く、予定していた講義から急遽変更になるということがあった。

これらの反省から、来年度は班全体で協力し、内容と用紙の作成を早め、配布の許可を12月半ばまでには押さえておき、誰がどの講義で用紙を配布するのかを表にして明確にしておきたい。

内容の反省点は、質問として浅いところで終わってしまっているものが多かったことである。

具体例としては、④の「ボランティアルームの季刊誌を知っていますか」では知っている・知らないで質問が完結してしまっており、「学生が季刊誌に求める情報は具体的に何か」という観点が抜け落ちてしまっていた。結果、どのように改善するかの考察部分がボランティアルームの主観での意見となってしまう、新しいアプローチの方法を提案するに留まってしまった。

また、⑦の質問に関しても、同じ事が言える。参加したい取り組みを質問した後に、なぜ

その選択肢を選んだのかという質問がないため、アンケートとして分かることが、ただ結果の数字で「福祉体験」が最も多いということのみである。よって、「福祉体験」が多く選ばれた理由は予想になってしまった。さらに、明確に順位付けをすれば違った結果になることも考えられる。

これらのことから、次回のアンケートでは結果から理由のところまでを意識し、項目内容の作成を行う。

〈今後の展望〉

今年度はボランティアルームとして全く学生と関わることができなかった。しかし、今回のようなアンケートの協力にも応え、協力していただいた。これは、ボランティアルームが学生からそれだけの信頼を得ているという証拠である。来年度、ボランティアが募集できる状況になったとき、しっかりと情報を伝えることができるように報連相の徹底、情報発信能力の向上など、ルームスタッフ全体のスキルアップに努めていきたい。

【文責：文学部国文学科2年 濱口英太】

## 4. 資 料



令和2年度 ボランティアルーム学生スタッフ一覧			
No.	所属	学年	名前
1	文学部国史学科	4	渡辺 楓
2	現代日本社会学部現代日本社会学科		才戸 俊祐
3			中西 正樹
4			山川 廣太郎
5	文学部神道学科	3	池田 千夏
6	文学部国史学科		下野 実紀
7			中西 涼
8	文学部コミュニケーション学科		中子 恵里花
9			西出 美郷
10			森田 麻友
11			吉田 綾奈
12	教育学部教育学科		濱口 奈々花
13			樋口 葵
14			村嶋 大輝
15			山川 菜月
16	現代日本社会学部現代日本社会学科		岡崎 優香
17			中桐 優太
18			福島 勇氣
19	文学部国文学科	2	濱口 英太
20	教育学部教育学科		奥田 陶子
21			川端 日南果
22			黒田 結規
23			坂谷 海怜
24			清水 美玖
25			杉山 瑞姫
26			袖岡 美菜
27			松岡 克佳

28	現代日本社会学部現代日本社会学科		勝又 未結
29			河俣 太一
30			須場 聖羅
31			土性 奈々香
32			行方 洸太
33			西 優一
34			増井 香苗
35			宮田 諭志
36			村上 葵
37			村林 凌樹
38			森 啓悦
39			八尾 幸哉
40	文学部国文学科	1	國分 大雅
41	文学部国史学科		河西 一成
42			鈴木 祥大
43			橋本 彩花
44	文学部コミュニケーション学科		石田 菜苗
45			伊藤 なゆた
46	教育学部教育学科		池下 日和
47			大森 萌花
48			城戸 裕介
49			小芝 実結
50			田中ゆ衣
51	現代日本社会学部現代日本社会学科		浅野 久瑠実
52			服部 花菜

